

日本における
ワーズワス文献



原田俊孝 編

桐原書店

編者 原田俊孝 (はらだ としたか)

1941年岡山県に生まれる。1970年同志社
大学大学院文学研究科修士課程(英文学専
攻)修了。現在、滋賀大学経済学部助教授。

[著書] 『ワーズワスの初期の神秘思想』
(滋賀大学経済学部研究叢書)。

[論文] 「スコットランド旅行にみるワー
ズワスとコウルリッジの離反」、『『白鹿』
とワーズワス』、『『シントラ協定論』とワ
ーズワス』ほか、ワーズワスおよびロマン
派詩人に関する論文多数。

日本におけるワーズワス文献

1990年1月20日 初版第1刷発行 ©

編 者 原 田 俊 孝

発 行 者 山 崎 賢 二

〒166 東京都杉並区高円寺南二丁目44-5

発 行 所 株 式 会 社 桐 原 書 店

電話 03-314-8181

振替 東京6-55244

印 刷 所 凸版印刷株式会社

装幀・鈴木 堯

ISBN 4-342-65340-0 C3098

推薦の言葉

明治 20 年代におけるワーズワスへの関心は驚くべきものがある。徳富猪一郎、若松賤子、巖本善治、宮崎湖處子、山田美妙、増田藤之助、島崎藤村、家永えい子、夏目漱石、大和田建樹、内村鑑三、坪内雄藏等の当時一流の文人が筆を揃えてワーズワスを謳歌しているのである。内でも宮崎湖處子は自らの名前をワーズワスのレークディストリクトにとり最も熱心にワーズワスを賞讃した。明治 23 年『帰省』に於て、ラルヅラルスの自然観に即した紀行文をものし、ウォルズォルス傳の短篇を書いた、明治 26 年拾文豪の一冊として民友社より『ラルヅラルス』を発表した。これはラルヅラルスと陶淵明を比較した比較文学史上有意義なものである。この他「我等七人」等の詩の訳もある。家永えい子は「稚き折のことを憶ひいでゝ永劫存在をさとの歌」を『國民之友』に発表したが殆ど同時に増田藤之助は「幼時の回想によりて性命の不朽を知る」と題して同じ詩を『日本英學新誌』に訳出している。夏目漱石は「英國詩人の天地山川に對する觀念」と題する論文を明治 26 年『哲學雜誌』に発表している。大和田建樹は『歐米名家詩集』を明治 27 年博文館より出版しているがその内には「母待つ子」、「小羊」、「郭公」等の詩を翻訳している。坪内雄藏は「ラルヅラルスの傳」を明治 29 年『國學院雜誌』に発表している。

以上明治 20 年代におけるワーズワスブームの実態を述べたものである。

以上は原田俊孝編の『日本におけるワーズワス文献』に基づいて書かれたものである。同書の精密正確にして行き届いた記述は驚くべきものがある。明治初年より現在に至るまでのワーズワス関係の書物をあますところなく記

述している。

ワーズワスに興味を持つ人は勿論、英文学一般に関心を持つ人、比較文学を研究する人は是非座右に一本を備えられん事をおすすめする。

原田君は同志社大学大学院に於て小生の講義を聞いた人であるが、その当時よりワーズワスに熱中し修士論文をワーズワス研究にしたことは勿論、其後20年間ワーズワス研究に没頭し今日の成果を挙げたのである。

平成元年 春しるす

岡 本 昌 夫

は し が き

イギリス・ロマン派詩人ウィリアム・ワーズワス (William Wordsworth, 1770-1850) がわが国に初めて紹介されたのは、明治4年(1871)のことである。その年に出版された中村正直訳の『西國立志編』(木平謙一郎蔵版)にその名がみられる。単行本としては明治26年(1893)の宮崎八百吉(湖處子)の『ヲルツヲルス』(民友社)が最初であった。以来、ワーズワス研究は年々盛んになり、今日では単行本もしばしば出版され、また論文数も年間50編近くにはのぼる。にもかかわらず、これらを集大成したワーズワス文献目録なるものが出版されていないのは、誠に遺憾と言わざるを得ない。そこで、編者はワーズワスに関する著作を収集しようと思いたち、今やっとここに出版に至った次第である。

本書ができあがるまでにはつきない思い出がある。昭和42年(1967)に同志社大学大学院に入学した編者は、ワーズワス研究を始めるにあたって、指導教官の児玉実用先生から「英文科の図書室にあるワーズワスのカードをすべて書き写せ」とのアドバイスを頂いた。ところが、いざ作業を進めてみると、洋書にはワーズワス関係の業績を網羅した詳細な文献目録が見つかったが、和書にはそれがないため、著書は容易に抽出できても、各大学の『紀要』や同人誌などに掲載された論文を見つけ出すことはなかなか困難であるのに気付いた。この時からいつかきっとわが手で文献目録を作成して世に出したいと思い、研究のかたわら収集作業に取りかかった。大学院修了後も研究を続けていくなかで、英文科に属さない編者は、英文学関係の資料を自由に閲覧できないハンディーがあるから、ますます書誌の必要性を痛感したわけで

ある。そこで、ワーズワス探しに一層熱が入り、それはやがて趣味と化し、古本屋へ出かけては『紀要』やその他の雑誌類に目を通すのが習慣となっていった。

こうして、いつしか 22 年が過ぎ去ってしまった。この間、手間がかかるわりには遅々として進まない作業に挫折感を抱くことも度々であった。このような状況の中で、出版のめどがたったのは昭和 57 年 (1982) のことであった。この年、文部省による内地研究の機会が与えられ、大阪市立大学の図書館を自由に利用できたことで飛躍的に収集作業が前進したのである。その節は栗山 稔先生にもろもろの御配慮ならびに御助言を賜った。ここに改めて感謝を申しあげる次第である。

最近では英米文学に関する文献もかなり出版されるようになり、ワーズワスの資料も見つけやすくなってきたのは喜ばしい限りである。編者も下記の書物を参考にさせて頂いたことを付記したい。

勇 康雄他(編), 「本邦ワーズワース文献表」, 青山学院大学 英文學會
『英文學思潮』第 23 卷第 2 号 (昭和 25 年 10 月 25 日)

安藤 勝(編集代表), 『外国文学研究文献要覧 I <英米文学>編 1965～
1974』, 日外アソシエーツ, 昭和 52 年 3 月 25 日

添田 透, 「日本におけるワーズワス書誌」, 『ワーズワス点描』, 大阪教
育図書, 昭和 52 年 10 月 20 日

「英語年鑑」編集部編, 『英語年鑑』(毎年刊行), 研究社

国立国会図書館参考書誌部(監修), 『雑誌記事索引』(人文・社会編), 日
外アソシエーツ

上述の参考文献を引用するにあたっては、一つずつ原本にあたって確認したが、それができない時は直接に執筆者、出版社、国立国会図書館、大学の図書館などへ問い合わせもした。その都度ていねいな御返事を頂き厚く御礼

申しあげる。わけでも、東京大学の上島建吉先生には *Wordsworth Circle* に寄稿するために集録された *A Report on William Wordsworth's Reputation in Japan* (岡地 嶺, 仙北谷晃一共編, 1970) の原稿を拝借させて頂き光栄の至りである。

また、推薦のお言葉を頂いた同志社女子大学名誉教授 岡本昌夫先生には学部在学中からお世話になっている。最近までイギリス・ロマン派学会の会長であられたが、今は名誉会員となっておられる。先生は御多忙で、しかも御健康もすぐれないにもかかわらず、編者のために快くお引き受け頂き心から感謝を申しあげる。

こうして、多くの人々に支えられながら、やっとここに出版することができた。収録した文献を一層充実させるためには、それぞれの資料に注釈が必要と考え、その作業を進めていたが、出版には大変な時間と費用がかかり、また膨大な頁数となるため、残念ながら今回は注釈を見送らざるを得なかった。従って、本書は決して自慢できるものではないが、これによって研究者や学生諸氏が文献探索の労を少しでも軽減され、ワーズワス研究の一層の発展に寄与できるならば、本望である。本書の出版にあたっては万全を期したつもりであるが、すべて手作業で原稿を作成したため、誤字、脱字、採録漏れなどのそしりは免れないであろう。機会をみて、補遺を出したいと思っている。お気付きの点を御一報下されれば幸いである。

平成元年 11 月

編 者

凡 例

1. 本書には、111 年間にわたる、すなわち、その初出年とみられる明治 4 年 (1871) から昭和 56 年 (1981) までの、日本におけるワーズワス文献を収録した。
1. 配列は、執筆者のアルファベット表記順によることとし、発行年ごとにまとめた。
1. 校正刷が出てから入手した文献については、補遺として巻末に収録した。
1. 単行本に関して、定期刊行物などに掲載された書評がある場合には、該当文献の次に【書評】として小活字で収録した。
1. 海外の文献に対する書評については、海外新刊書評として、書評掲載年の末尾にまとめて掲げた。
1. 各項末尾のイタリック体の数字は、文献の通し番号である。
1. [] 内は、編者による解説ないし注記である。
1. 各項目とも、著書名、編者名、書名、研究題目、紙・誌名、出版社名の文字表記については、すべて原本記載のとおりとした(ただし、異体字に関して、活字にない場合、やむなく正字体に改めたものもわずかにある)。「当用漢字字体表」が告示された昭和 24 年 (1949) の翌年ごろから、一部の固有名詞を除き、現代表記が定着していくのを見ることができる。
1. 全編を通して使用される共通の用字用語(たとえば、訳、訳注、注釈、巻、号など)についてはすべて新字体に統一した。
1. 和文の書名には『 』を、論文名や単行本中の一編には「 」を付した。「 」の中にさらに「 」を使用する場合には「 」を使用した。これは欧文における、イタリック体、“ ”, ‘ ’ にそれぞれ対応する。
1. 頁数を示す p. または pp., 行数を示す l. または ll. は、誤解のおそれのないかぎり省略した。
1. 索引は、煩を厭わず、詳細なものを付けた。

目 次

推薦の言葉..... 岡 本 昌 夫	i
はしがき.....	iii
凡例.....	vii
明 治 期	1
大 正 期	21
昭 和 期	35
補 遺	211
索引.....	215

明治期

明治4年(1871)

中村正直(訳), 英國スミルス^{スマイルズ}(Smiles)著, 『西國立志編 原名 自助論』
(SELF-HELP) 第一冊第一編, 駿河國静岡藩 木平謙一郎藏版, 明治4年。
〔日本ではじめて「窩圖窩土」^{ウターツウターズ}に言及〕 1

明治18年(1885)

筆者不詳, 「詩人ウーゾオールの傳」, 日本文學會『文學雜誌』第12号(明治18年11月30日), 825-835。 2

明治21年(1888)

徳富猪一郎, 「新日本の詩人」, 民友社『國民之友』第27号(明治21年8月3日), 178(10)-185(17)。〔「...真正の詩人, 即ち高尚なる意味に於ての詩人, 彼のヴォルツヴォルスが明言したる如く, 眞理に就て, 高大に就て, 美妙に就て, 愛と望みとに就て, 及び信仰に依つて調和されたる悲愴なる恐懼に就て, 苦しめる時に於て恵まれたる慰藉に就て, 道德の浩氣に就て, 智恵の勢力に就て, 廣く天下庶民の間に溢れたる祝喜に就て, 歌ふ所の詩人は未だ之れ有るを見ず...。」〕 3

若松賤子, 「The Complaint」, 女學雜誌社『女學雜誌』第113号(明治21年6月9日), 66<叢話欄>。 4

筆者不詳, 「ライツタルスの兄妹」, 女學雜誌社『女學雜誌』第112号(明治21年6月2日), 34-35<叢話欄>。 5

明治 23 (1890)

巖本善治 「英文學は大なる文學なり」, 女學雜誌社『女學雜誌』第 207 号(明治 23 年 4 月 5 日), 177<社説欄>。〔「外國文學中、尤も謹厚敬虔なる文學なり、純潔の思念、雄大なる理想其中に充滿す、是れミルトンの文學なり、ミルトンの文學なり、ボルク、カーライルの文學なり、バルンス、ウォルト・ワイルス、エマソン、ブラウニングの文學なり、...。』 6

かすみ, 「深夜の星こゝろの歌」, 女學雜誌社『女學雜誌』第 224 号(明治 23 年 8 月 2 日), 677<雜錄欄>。〔「*To me the meanest flower that blows can give thoughts that do often lie too deep [sic] for tears*」を引用] 7

宮崎湖處子, 『歸省』, 民友社, 明治 23 年。〔「*ワルツ*の自然觀に即した紀行文」 8

と, ら, 「*ウィリアム ウォルツウォールス*傳(-)」, 女學雜誌社『女學雜誌』第 194 号(明治 23 年 1 月 1 日), 533-534<雜錄欄>。 9

——, 「*ウィリアム ウォルツウォールス*傳(二)」, 女學雜誌社『女學雜誌』第 199 号(明治 23 年 2 月 8 日), 675-676<雜錄欄>。 10

徳富猪一郎, 「文家秘訣」(-), 民友社『國民之友』第 99 号(明治 23 年 11 月 3 日), 677(39)-678(40)。〔「...誰も皆己が得意の詩人をもつものなるが、余が愛する所は*ワルツウォールス*なり。...」, p. 40] 11

山田美妙, 「日本韻文論」(2), 民友社『國民之友』第 97 号(明治 23 年 10 月 13 日), 556(18)-564(26)。〔「...中で屈指なのはをるづをるす, こりれッち, キイツ, シェレい, ばいろん, すこッとの類, ...。』, p. 19] 12

明治 24 年 (1891)

巖本善治, 「田舎詩人, 亂酒詩人」, 女學雜誌社『女學雜誌』第 248 号(明治 24 年 1 月 17 日), 613-615<社説欄>。〔「*Ne'er saw*」

I, never felt, a calm so deep! / the [*sic*] river glideth at his own sweet will: / Dear God: The very houses seem asleep; / And all that mighty heart is lying still” (“Composed upon Westminster Bridge, September 3, 1802”, 11-14) を引用] 13

澁江 保, 「ウラーズウラース」(201-202), 『英國文學史 全』, 博文館, 明治 24 年 11 月 17 日, 四六判, iii+264 頁。〔明治 26 年 3 月 27 日に『通俗教育全書』第五十八編として再版〕 14

山田美妙(訳), 「韻文, 山の翁(-)」, 民友社『國民之友』第 118 号(明治 24 年 5 月 13 日), 719(37)-723(41)。〔“Michael” の訳詩。調は 5, 5, 7。pp.719-720 に “Green-head Ghyll”(“Michael”) の解説〕 15

——(訳), 「韻文, 山の翁(=)」, 民友社『國民之友』第 121 号(明治 24 年 6 月 13 日), 865(35)-867(37)。 16

明治 25 年 (1892)

デクソン教授, 「鴨 長明とウオイヅラルス」, 女學雜誌社『女學雜誌』第 305 号(明治 25 年 2 月 20 日), 754<文學欄>。〔明治 19 年 4 月から明治 25 年 3 月まで東京帝國大學で英語と英文学を講じていた James Main Dixon 教授が, 亞細亞教會において講演したものを要約〕 17

増田藤之助, 「ウオーズウオース『靈魂不滅』の歌」, 日本英學新誌發行所『日本英學新誌』第 13 号(明治 25 年 9 月 28 日), 29-30。〔p.1 の梗概の次に「虹」の詩をかかえてこれを訳註し, この詩と「靈魂不滅の歌」との関係の深いことを述べる。豊田 實『日本英學史の研究』, 岩波書店, 昭和 14 年 2 月 9 日, 150×220 判, 8+736+59 頁, pp.410-413 参照〕 18

——(訳註), 「幼時を回想して性命の不朽を知る」(I-III), 日本英學新誌發行所『日本英學新誌』第 14 号(明治 25 年 10 月 13 日), 33-36。 19

——(訳註), 「幼時の回想によりて性命の不朽を知る」(IV-V), 日本英學新誌發行所『日本英學新誌』第 15 号(明治 25 年 10 月 28 日), 33-37。 20

——(訳註)、「幼時の回想によりて性命の不朽を知る」(VI-VII), 日本英學新誌發行所『日本英學新誌』第 18 号(明治 25 年 12 月 13 日), 34-37.

21

宮崎湖處子(訳)、「るうしい、ぐれい」(ウオルズウオース作), 國民新聞社『國民新聞』第 761 号附録(明治 25 年 7 月 10 日), 1.

22

島崎藤村, 「郭公詞」(To the Cuckoo), 女學雜誌社『女學雜誌』第 322 号(明治 25 年 7 月 2 日), 1174-1177<論説欄>.

23

徳富猪一郎, 「コンコルド哲人の片金遺玉」(3), 民友社『國民之友』第 149 号(明治 25 年 3 月 23 日), 34-37. 「...エモルソン氏はグレーロックを指して謂て曰く、彼處に儼かなる山あり。此は恰も「ジ・エクスコルシヨン」(ウオヅウオールの作)を読む可き場所なり。...彼の名高き句、海にも陸にもためしなき光、聖別、と / 詩人の夢 / を作りしさまを想見す可し。...」

24

——, 「詩人の題目」, 民友社『國民之友』第 171 号(明治 25 年 11 月 3 日), 656(10)-659(13). 「...以て英國に自由思想を鼓吹したる者は、ソウセイ、コーレリッチ、ウアルズウアルスの徒にして...」

25

筆者不詳, 「藻鹽草 一語千金」, 民友社『國民之友』第 155 号(明治 25 年 5 月 23 日), 768(28). 「「自然ノ天地ハ己レヲ愛セシ心(人)ニ決シテ負カザリキ ウアルズウアルス」“Nature never did betray / The heart that loved her. —Wordsworth”」

26

——, 「藻鹽草 一語千金」, 民友社『國民之友』, 第 156 号(明治 25 年 6 月 3 日), 817(27). 「「余レ天ニ虹ノ横ハルヲ見ルヤ吾心躍ル ウアルズウアルス」“My heart leaps up when I behold / A rainbow in the sky. —Wordsworth”」

27

——, 「藻鹽草 一語千金」, 民友社『國民之友』, 第 171 号(明治 25 年 11 月 3 日), 672(26). 「「極メテ卑シキ花モ涙ノ届カス思想ヲ時トシテハ起スヲ得 ウアルズウアルス」“The meanest flower can sometimes pro-

duce thoughts that lie too deep for tears. —Wordsworth”] 28

——, 「藻鹽草 一語千金」, 民友社『國民之友』第 174 号(明治 25 年 12 月 3 日), 814(18)。[「智慧ハ仰グ時ヨリモ俯ス時ニ近シ ウラルヅウラルス」 “Wisdom is oftentimes nearer when we stoop than when we soar. —Wordsworth”] 29

明治 26 年 (1893)

家永えい子(訳), 「稚き折のことを憶ひいでゝ永劫存在をさ とる の 歌」, 民友社『國民之友』第 186 号(明治 26 年 4 月 3 日), 537(25)–540(28)。
[“Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood” の訳。結句—「あはれわれには 咲出る小草が花も ^{うつつよ} 現世の涙のしらぬ いとふかき 思ひをしらする しをりとぞなる」] 30

増田藤之助(訳註), 「幼時の回想によりて性命の不朽を知る」(VIII), 日本英學新誌發行所『日本英學新誌』第 21 号(明治 26 年 2 月 2 日), 32–33。

31

——(訳註), 「幼時の回想によりて性命の不朽を知る」(IX), 日本英學新誌發行所『日本英學新誌』第 22 号(明治 26 年 2 月 7 日), 28–32。 32

——(訳註), 「幼時の回想によりて性命の不朽を知る」(X), 日本英學新誌發行所『日本英學新誌』第 23 号(明治 26 年 2 月 28 日), 19–21。 33

——(訳註), 「幼時の回想によりて性命の不朽を知る」(XI), 日本英學新誌發行所『日本英學新誌』第 24 号(明治 26 年 3 月 13 日), 22–24。 34

宮崎湖處子(訳), 「我等七人」(^{われらななたり} We are Seven) (ウオルズウーオス作「いで入る息のいとかるく」), 71–79; 「泉」(The Fountain) (ラルズラルス作「マシユーとよべる年よりと」), 79–87, 『湖處子詩集』(ニッケル文庫), 右文社, 明治 26 年 1 月 31 日, B 7 判, 88+16 頁。 35

宮崎八百吉, 『ラルヅラルス』(拾式文豪 第四卷), 民友社, 明治 26 年 10 月

17 日, 四六判, iii+ii+210 頁。〔Wordsworth に関する最初の単行本, 詩人に対する崇拜が吐露されている。Myers の *Wordsworth* による〕

36

(目次)

詩人前記 第一章 自然の兒及び其故郷; 第二章 田舎漢及びカムブリツヂ大學; 第三章 生活の撰擇及び佛國革命。詩人正記第一章 天生の詩人及び其妹嬢; 第二章 革新詩人ヲルヅタルス及び舊派詩人コレリツヂ; 第三章 湖畔詩人及び其閑居; 第四章 湖畔詩人及び其家庭; 第五章 湖畔詩人及び其詩; 第六章 ヲルヅタルス及び讀詩社會。詩人後記 ヲルヅタルス及び陶淵明。

【書評】

平田禿木, 「ヲルズタルス」, 文學界雜誌社『文學界』第 12 号(明治 26 年 11 月 30 日), 27。

夏目漱石, 「英國詩人の天地山川に對する觀念」, 『哲學雜誌』明治 26 年 6 月。〔ウオーツウースの “Tintern Abbey”, “The Rainbow” を引用し, バーンズと比較。この論文は大正 9 年 9 月に発行の『漱石全集』第十巻に収録。さらに, 昭和 3 年 6 月 5 日に発行の『漱石全集』(普及版) 第十五巻にも収録, 昭和 3 年の「夏目漱石」の項を参照〕

37

植村正久, 「自然界の豫言者ウォルズウォルス」, 『日本評論』明治 26 年 8 月, 9 月。〔植村全集刊行會『植村全集』第七卷(文學及人物篇), 昭和 7 年 11 月 15 日, 四六判, vii+609 頁に収録〕

38

山田武太郎, 「うをるづうをるす」(607-610), 『萬國人名辭書』上巻「外國之部」, 博文館, 明治 26 年 7 月 10 日, 四六判, vii+iv+818+406 頁。

39

筆者不詳, 「藻鹽草 一語千金」, 民友社『國民之友』第 180 号(明治 26 年 2 月 3 日), 218(20)。〔「最も馨き花ハ羞ヂ且謙ル ウタルヅ ウタルス」 “The flower of sweetest smell is shy and lowly. —Wordsworth”〕

40

——, 「藻鹽草 一語千金」, 民友社『國民之友』第 182 号(明治 26 年 2 月 23 日), 325(19)。〔「眞美ハ深山幽谷ニ在リ ウタルヅウタルス」 “True beauty dwells in deep retreat. —Wordsworth”〕

41

——,「藻鹽草 一語千金」,民友社『國民之友』第 183 号(明治 26 年 3 月 3 日),380(24)。[「心眼ハ幽獨ノ福ナリ ウタルヅウタル ス」“The inward eye is the bliss of solitude. —Wordsworth”] 42

——,「藻鹽草 一語千金」,民友社『國民之友』第 203 号(明治 26 年 9 月 23 日),478 (20)。[「何ヲモ與フベキ物ナキ人ハ亦何ヲモ感受セズ ウタルヅウタルス」“Minds that have nothing to confer find little to perceive. —Wordsworth”] 43

明治 27 年 (1894)

大和田建樹(輯訳),「母待つ子」(中巻,74-83);「貧女の歎き」(中巻,102-104);「小羊」(中巻,108-119);「胡蝶」(下巻,109-111);「郭公」(下巻,159-164)(ウォーツウォース),『歐米名家詩集』,博文館,明治 27 年 3 月 26 日(明治 37 年 5 月 25 日 合本),四六判,ii+x+198+192+208 頁。 44

【書評】

評者不詳,同志社文學社『同志社文學』第 75 号(明治 27 年 3 月 23 日),38。

——,「ウキリヤム・ウォーツウォース」,『英米文人傳』(國民文庫 第九編),博文館,明治 27 年 9 月 24 日,四六判,iv+188 頁。 45

明治 28 年 (1895)

内村鑑三,「如何にして大文學を得ん乎」(續),民友社『國民之友』第 266 号(明治 28 年 10 月 19 日),649(15)-654(20)。[「一莖の野草,七十の老詩人に此冀望の讚美歌を供す,有名なる The Excursion, Laodamia, Evening Ode 等皆な此類なり,「全地は冀望の美を装ふ」,詩人オルツオス出て自然は靈化されしの感あり。オルツオスは千八百五十年にライダル山に於て世を逝れり,・・・」,p.16] 46

筆者不詳,「藻鹽草 一語千金」,民友社『國民之友』第 256 号(明治 28 年 7 月 13 日),65(17)。[「請フ出デ、遊ベ、一ニ自然ヲ友トセヨ ウタルヅウタルス」“Come forth into the light of things; / Let Nature be